EDO-TOMO
えど友
No. 5
平成14年
2002
1
江戸東京博物館友の会会報

【新春特集】竹内館長に聞く、江戸のお正月

江戸前で拝んだ初日の出

◆出席者◆
江戸東京博物館長　竹内　誠さん
友の会事業部会長　山口千恵子さん
同広報部副部会長　岡橋園子さん

山口　竹内館長さんには、お忙しいなかをありがとうございます。今日は、江戸のお正月の話をいろいろお伺いしたいと思います。

竹内　まずは私の体験からお話ししますと、「もういくつ寝るとお正月」という歌がありますね。「早く来い来いお正月」で、子どもにとっては、12月に入るともう待ち遠しくて仕方ありませんでした(笑い)。でも、うまい仕掛けがあって、だんだん近づいて来るのが肌で感じられる。たとえば大掃除。畳を出してパンパン叩く家もあれば、障子の張り替えをしたり…。それから餅つき。皆それぞれの家庭でつきましたね。28日が多かったようですが、その餅つきが何か華やいだ、ハレの世界のイメージでした。

「年の瀬からお正月へ、華やいだハレの世界でした」竹内館長

山口　家々に松飾りをして、注連縄(しめなわ)を張る。町内の鳶(とび)職の方たちが1軒ずつ回って飾り付けしてくださいました。

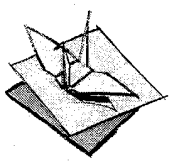
竹内　そこへ木枯らしが吹いてカサカサ鳴って、こんな風情も正月へ向かって興奮を高めていきましたね。

山口　大晦日(おおみそか)になって、除夜の鐘が鳴ると年越しそばを食べました。

竹内　江戸時代の史料を見ますと「晦日そば」といいまして、大晦日はもちろんですが、毎月、月末には食べたようです。それも、出前をとるのでなく、おそば屋さんへ行って食べました。

岡橋　大晦日で1年を締めくくり、夜が明けると、待ってた新しい年ですね。

竹内　正月というと、「早く来い来い」には大きな意味がありまして、ひとつ年をとるのです。昔



ハ・イ・ラ・イ・ト

- 新年おめでとうございます。本年も友の会活動にご協力をよろしくお願い申し上げます。
- 新春特集　「竹内館長に聞く・江戸のお正月」
- 友の会セミナー/講座の要旨
  - ・「江戸の見世物を楽しむ」
  - ・特別内覧会「東京建築展」
  - ・見学会「渋沢史料館」
- 会員のページ…投稿など紹介
  - ・会員の声に答えて
  - ・投稿「たかが落語、されど落語」菅沼和男
  - ・テーマ投稿「私と江戸」募集中
- 《事業部会だより》
  - ・2/2　第5回セミナー受付中
  - ・2/16 第6回セミナー受付中
- 会員優待のお知らせ——
  - ・「東京建築展」好評開催中！
  - ・次回企画展の予告
- 本号から愛称募集で会報名が「えど友」に変わりました。
- この会報は、皆さんと一緒に創るコミュニケーション情報誌です。ご意見、ご要望、投稿などをお寄せください。

[写真] 山口さん(左)、岡橋さん(右)

は数え年でしたから、日本全国いっせいに年をとる。家族そろってお屠蘇(とそ)を祝いながら、今年はいくつになったと、披露しあったものです。これはうれしかった。

戦後のある時期から満年齢で数えるようになったので、お正月の重みがずっと軽くなってしまいましたね。

岡橋 母がすべてのものを新調してくれました。

竹内 そうそう。茶碗や箸(はし)箱から下着も足袋も新しい。下駄もおニューになるんです。これから1年間、大切に使っていくものだということで、確かなけじめがありました。

山口 昔のお正月は、本当にハレの日でしたね。

竹内 江戸のお正月は「初日の出」を拝むことから始まるんです。これが大きな行事でした。下町では遠くまで足を運ばなくても拝めたんです、江戸前の海が近かったから。有名なところでは深川の洲崎とか、芝浦、品川などの海岸へ行って、お日さまが上がってくるのを拝みました。山の手なら高台の端に行けば、下町の向こうに見えた。湯島台とか、上野台とか、駿河台とか。

名物！佐竹藩の人飾り

岡橋 それから初詣ですね。江戸のころはどんな所へ行ったのでしょうか。

竹内 恵方詣りですね。その年の恵方、つまり、吉の方角に当る神社やお寺へ詣でました。昔の人は歩くのが速かったですよ。だから、結構遠い所へも短時間で行ってきちゃうんです。

また、江戸時代には各藩の藩邸がみんな大きな門松を立てたので、見に行くんです。なかでも有名だったのは下谷・三味線堀(現台東区台東)にあった佐竹藩屋敷の「人飾り」でした。松飾りじゃないんですよ。侍が門の左右にきちっと座っている、これが名物。

岡橋 「松」でなく「人」がですか。

竹内 そうです。裃(かみしも)つけた侍が松の代わりをしているんです。

山口 お雑煮の話になると家々によって、作り方が違いますね。

竹内 各地の風習が混ざりあっていました。江戸文化というのは、地方から大勢の人が来ていましたから、様式はいろいろでした。それだけ各地のものが江戸にまじっているのに、ぐるぐるっと攪拌しているうちに、これが江戸文化でござい、ってものができたんですね。

岡橋 先生のお宅では、お節(せち)はいかがでしたか。

竹内 ほかの家とあまり変わりがありませんでした。数の子、ごまめ、黒豆とか。暮の内からお節料理をつくる女の人たちの甲斐甲斐(かいがい)しい動きっていうのは、子ども心にも覚えています。

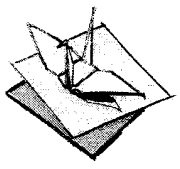
山口 準備が大変なんですよ。2日がかりで煮付けるわけですから。数の子はお米のとぎ汁にひたしたりして。

竹内 私の一番好きなものは数の子でしたね。まだ大人の舌をしていませんでしたから、豆がよく煮えててうまいとかわからない、魚もごまめではね。やはりおいしいのは、キントンと数の子でしたよ。

山口 当時はお正月の料理というと特別でしたが、今はいつでも、どこでもありますから。

竹内 キントンなんかめったに食べられなかった。お節は、本来は正月三が日は女の方々が働かなくてもすむようにというのが、いわれですね。

岡橋 今はぜんぶ出来たものが売っていて…。



竹内 それに、三が日をホテルで過ごす家庭が多くなりました。私のところもそうなんですが、昨年からお台場のほうで…。孫が喜ぶような施設があるでしょ。それでちゃんと出るんですよ、お節もお屠蘇も(一同爆笑)。

お年玉、朝湯、そして初夢

岡橋 うれしかったのはお年玉でした。お年玉の由来は何でしょうか。

竹内 それは最高の楽しみでした。日ごろお小遣いをもらうのが大変でしたからうれしさが違うんです。初めて自分で使えるお金だって。

本来は神へ奉納したものです。それをお裾分けの形で、みんなに分けたのですね。お米や果物など。ですから、初めはお金とは限らなかった。よく手拭いを配ったでしょ。商店がお得意さまに配るのに「お年玉」って書いてあって。武鑑という職員録みたいなものを一枚摺りにして、それを配ったりもしました。扇子、手拭い、暦、今でいえばカレンダーのような物もお年玉です。

普段が質素だったから、ハレの日の喜びは大きかったんです。今の人は普段でも盆と正月が来てるようなもので。

山口 子どもたちはクリスマスプレゼントをもらって、またお正月ですから。

竹内 昔のお正月はみんなが誕生日だから、「祝う今日こそめでたけれ」って。それがよかった。

山口 それで二日になると初荷でしたね。リヤカーに初荷って書いた旗や幟を立てて。

竹内 そう。これも江戸時代から始まりました。儀礼的なもので、新調した半纏(はんてん)を着て祝い歌を歌ったり、祝い酒をふるまったり、賑やかに行われました。

山口 でも、私は母から「7日の蔵開きまではお財布からお金を出しちゃいけない」っていわれてました。

竹内 なるほど。それから、二日には朝湯へ行きましたね。これもうれしかった。大晦日は明け方まであるんですよ。それで、いったん火を落としたあと、またすぐ二日に開くんです。

江戸時代はもっと大変だったんですよ。元日に銭湯があったんです。その代わり、お捻(ひね)りという、特別にね、余分に払うんです。ふつうは8文で入れるのに、さらにいくらかお捻りを払うんです。

「江戸のお正月は、新しい年へのけじめでした」竹内館長

山口　それは番台でですか。

竹内　三方が置いてあるんです、番台に。「戴(いただ)きたい」という印が置いてある(一同爆笑)。それは主人のものになるのではなく、使用人に分けられたようです。

朝湯は何がいいかっていうと、朝日が斜めに入ってくるんですよ。その光景というのは普段は見られないわけですね。明るい朝の日差しが上の天窓のところからサーッと入ってきて、気持ちがいい。そして空気が乾いてますから、桶がカラーンカラーンと甲高い音がするんです。まだ湿ってないから。

岡橋　それから初夢。これは元日の夜に見るんですよね。

竹内　元日に、お宝屋さんが「お宝、お宝〜、宝船」って売りにきました。紙に七福神が船に乗ってる絵が描いてあって、「長き世のとおの眠りのみな目覚め、波乗り船の音のよきかな」っていう和歌が書いてある。これは、上から読んでも下から読んでも同じ、回文です。これを枕の下に敷いて寝ると、いい夢が見られて、今年の運が開けるという。

山口　一富士二鷹三茄子とか。

岡橋　大晦日の夜は寝ないで過ごすわけですから、物理的に元旦の夜、つまり二日の朝までに見るのが初夢ということになりますよね。

山口　三河万歳も獅子舞いも、今はまったく来なくなりました。

竹内　昔は必ず来ましたね、寿ぎで。ただ、太夫と才蔵が2人で1組ですが、三河から万歳装束の太夫が江戸にやってきて、大晦日の夜に日本橋の南詰めから江戸橋にかけて開かれていた才蔵市で、コンビになる才蔵を抱えたといいます。

山口　獅子舞いは子どものころ、お獅子が来るっていって逃げ回った記憶があります。玄関先で。中まで入ってきて、噛(か)む振りをして怖かった。

竹内　門付(かどづけ)ですから。どの家へ行けばご祝儀をいただけるか、だいたい決まっていたそうです。

多彩な、お正月の遊び

山口　ところで、お正月の遊びと言いますと？　凧(たこ)揚げなども…

竹内　私は奴(やっこ)凧でなく四角でしたね。電線がそんなになかったから、凧はいろいろなところで揚げられました。羽根つき、それに竹馬も。

江戸時代には、凧屋さんは元日から露店でやっていました。形もいろいろあって、奴凧とか扇凧とか、角凧とか。絵は武者絵がほとんどで、字凧は龍とか、壽、鷲、嵐などといった画数の多い字が書いてありました。これは今もあまり変わりませんね。

山口　独楽(こま)やカルタは？

竹内　「独楽を回して遊びましょ」って歌にありますけど、必ずしもお正月の遊びに限らなかった。ただ江戸時代は大独楽だったと思います。

カルタもやりましたね。これもいろいろな種類がありますけど、家では百人一首が中心で。でも、私は和歌を覚えるのが面倒でしたから、坊主めくりというのをやってましたよ。それから、福笑い。おかめのね。あれは本当に人気がありました。

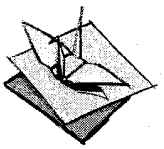
岡橋　今は、おかめでなくて、ドラえもんとかです(笑い)。

竹内　それから双六(すごろく)。お正月は、家に入れば双六、福笑い。外へ出ると、羽根つきとか、凧揚げ。それに独楽回しとか。みんな新調の着物でね、上から下までしゃきっとして…。

遊びだけじゃなくて、二日は書き初めをやりました。「初日の出」などと書く。冬休みの宿題で、学校へ持っていくために、普段の何倍もの大きな紙に書かなくちゃいけない。

山口　七福神めぐりが始まったのは、江戸時代からでしょうか。

竹内　つくられたものです、江戸の人はこういうのが好きですから。ほかにも六地蔵とか、五不動とかありますね。それから干支(えと)にちなむ縁日で、年の初めは初子(はつね)の大黒天、初寅の毘沙門天、初卯の妙義さんなどが賑やかでした。数えあげたらきりがなくて、ほとんど毎日のように江戸のどこかで縁日が開かれていたんです。



山口　初日の出とか、初詣とか、2月になれば初午、5月には初鰹(はつがつお)。江戸っ子は初好みですね。

今日は楽しいお話を本当にありがとうございました。

【構成：広報部会・大松騏一】

新年のごあいさつ

江戸東京博物館館長　竹内誠

明けましておめでとうございます。

平成14年度は、私ども江戸東京博物館が開館して、ちょうど10周年目に当たります。変動する時代のなかで、これはひとつの大きな節目といえ、新春からいろいろな催し物を意欲的に行っていきたいと考えています。

おかげさまで、昨年は好評の企画がたくさんあり、多くのお客さまにご来館いただきましたが、今年も学芸員や職員の方々と一緒に「開かれた博物館」を目指し、さらに大勢の皆さまに楽しんでいただきたいと思っています。

友の会の皆さまには、どうぞよい一年を迎えられますよう、また館の発展のためにより一層の応援をお願いいたします。

第3回江戸東京博物館友の会セミナー要録(2001/11/15)

江戸の見世物を楽しむ

見世物研究家　川添　裕さん

見世物というと、皆さんは蛇女とか鬼娘という、おどろおどろしいものを思い浮かべるかもしれません。でも、それらは江戸時代後期には中心的なものではなく、大勢の人を集めたのは、もっと楽しくて、見ごたえのあるものでした。

小屋の大きさひとつをとっても、たとえば弘化4年(1847)に浅草で興行願いがだされた「朝比奈大人形」の場合、間口40間(約73m)・奥行11間(約20m)という大規模なものでした。今日、祭のときの見世物の小屋は7間×5間くらいですし、歌舞伎座の舞台間口も15間ですから、いかに大きかったか分かります。

次に興行期間ですが、大がかりなものだと、普通は50日間が基準になっていました。ヒットすると、もう1回50日間を日延べして100日間の興行になっていきます。後述する「ラクダの見世物」は、ざっと半年間も観客が絶えませんでした。いまでいえばミュージカルの「キャッツ」のイメージですね。

◆見世物の中心地は、両国と浅草

江戸博には両国の賑わいをミニチュアにした展示がありますが、見世物の中心地は、両国橋の西詰めと浅草の奥山(本堂の裏手)でした。

両国橋花火の光景の浮世絵を見ますと、背の高い小屋が描かれていて、「大坂下り女かるわざ」の幟(のぼり)が見えます。上方の芸はレベルが高く、女性が演じるのは寛政(1789-1800)ごろからの流行で、人気がありました。

また、曲馬・曲芸もよく興行されました。曲馬というと、現代人はサーカスと思いがちですが、演目は「三番叟」や「狐忠信」というように歌舞伎と共通し、馬に乗って芝居をする「曲馬芝居」といったほうが理解しやすいでしょう。

大きな細工物は、最も多くの観客を集めました。籠(かご)細工とか、貝細工、ギヤマン(ガラス)細工などいろいろあって、見世物の半分くらいはこれです。

一田庄七郎による籠細工の関羽
(初代歌川国貞画、文政2年、講師蔵)

なかでも一田庄七郎(いちだ・しょうしちろう)という人の籠細工は、竹を編んで非常に大きな人形、たとえば関羽(三国志の名高い武将)像【上図】などをつくったもので、大ヒットしました。記録では高さ約8mで、見上げるような大きさでした。

大きいだけでなく、なかにはカラクリ仕掛けで、手足や身体が動くものもありました。いま話題のユニバーサル・スタジオ・ジャパンや東京ディズニーシーなどにも、恐竜や大きな動く人形がありますが、その本家みたいなものです。

◆珍しい動物にはご利益があった

見世物の3大ジャンルというと、こうした曲馬・曲芸、大きな細工物のほかに、珍しい動物(ラクダ、象、ヒクイドリなど)がありました。江戸時代には長崎を経由して、外国の動物がいろいろ入って来ます。これら動物の見世物には共通した特長がありました。見た者にご利益があるということです。

たとえば、文政7年(1824)に両国で行われたラクダの見世物では、宣伝文句に「此図を粘(はり)おきて常に見る時は、痘瘡(ほうそう)麻疹(はしか)をかろくし悪魔をさるの妙あり」としています。

珍しい動物を見たり、触ったり、その絵を持っていると、悪病を避けられるという信仰があって、観客はその動物の毛とか絵を買って帰ったのです。

◆観客動員40万人の大ヒットも

ここで小屋の構造を見ますと、すべて仮設で、下のほうはヨシズがけ、上のほうは酒樽に使った菰(こも)が再利用されて、正面に演目を示す絵看板が掲げられていました。

入口には「木戸番」がいて、入場料を払うと木の札が渡されます。切符の代わりで、入場料のことを「札銭(ふだせん)」というのは、ここから始まっています。

舞台の傍らには、必ず「口上」の芸人がいます。面白おかしく演目を説明する人で、どんな見世物でも大切な存在でした。一般的に上方系の話芸の芸人で質が高かったようです。

客層はというと、きわめて広かったといえます。かつて上野動物園にパンダが来た時など、老若男女を問わず、多くの人が見にいきましたが、ヒットした興行はそんなイメージです。前述した籠細工やラクダの見世物では、なんと会期中に40万人とか30万人といった規模の観客が詰め掛けています。

最後に入場料ですが、文政期(1818-30)の流行見世物は32文。いまの価値に直すと800円から1,000円くらい。歌舞伎は最低でも162文(約5,000円)でしたから、それより安く、庶民が気軽に楽しめる娯楽だったことが分かります。

講師著書は、『江戸の見世物』岩波新書681(2000年7月、岩波書店発行)です。

【記録:広報部会・大松騏一】

江戸東京博物館友の会特別内覧会(2001/11/19)

【企画展】東京建築展の見どころ

ー住まいの軌跡／都市の奇跡ー

解説:江戸東京博物館・専門研究員　米山　勇

東京建築展の開催に先立って11月19日(月)、友の会特別内覧会が開催されました。当日は午後5時の受け付け開始から、6時開場までの1時間、ウエルカム・ドリンク(コーヒー・紅茶)のサービスがありました。

1階ホールロビーで担当の米山勇専門研究員の解説を聴いた後、見学に入りました。展示場では主として米山氏が解説し、早川・佐々木・河村各学芸員、それに小金井の江戸東京たてもの園から馳せつけた阿部・高橋両専門調査員が、要所で解説を受持ちました。

会場内に構築した関東大震災以後の鉄筋コンクリート住宅、同潤会代官山アパートでは1942年(昭和17年)当時の住人で"住宅研究家西山卯三氏"に扮(ふん)した俳優さんが、その特徴や住み心地をきめ細かく語ってくれました。

はじめて家が工場で作られるようになった1963年(昭和38年)ころのプレハブ住宅の実物では"Dハウスの営業マン中村クン"に扮する俳優さんが、商品の説明から火災保険や資金調達の優遇制度までを、立て板に水の見事な演技の一席でした。

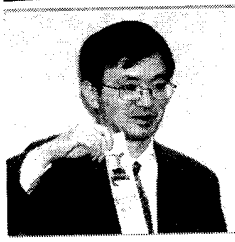
これらのパフォーマンスは、期間中、土・日・祝日に随時行う予定だそうですが、大変に迫力がありました。私たち会員の見学タイミングに合わせて比較的少人数で見られたことは、内覧会ならではの、すばらしい特典でした。

展示は、同時開催している江戸東京たてもの園の「震災以前」につづき、「震災以後」を見せるものです。東京という都市の風景の変化を振り返ると、明治政府の欧化政策、関東大震災による一瞬の壊滅、東京市の意欲的な復興計画とその実施、太平洋戦争ではアメリカの空襲による焦土化、緊急の住宅供給と復興、建築が国際レベルに達した東京オリンピックと高度成長の時代、そして世界をリードして皆が花見酒に酔い、大規模再開発をしたり、遊びの建築を楽しんだバブルの時代……。東京という都市が、世界でも希有な経験を積み重ね、その上を驚くべきエネルギーで突っ走って来た素晴らしい街であることを感じました。

展示の解説をする米山専門研究員。背景パネルは関東大震災で壊れた浅草・凌雲閣(浅草十二階)。

今回の図録(関連図書)は建築物を飛び出す絵本にしたなかなかの力作ですが、この展覧会のコンセプトや見せ方の狙いについては説明がほとんど記載されていないので、内覧会で担当研究員・学芸員の説明を聴いたことによって興味は倍増し、大いに理解を深めました。

【記録:広報部会・佐藤幸彦】



江戸東京博物館友の会　見学会(2001/12/2)

渋沢史料館を訪ねて

ー渋沢栄一の事績、解説と庭園・展示見学ー

解説:渋沢史料館・学芸員　五十嵐　卓さん

友の会初の見学会が12月2日(日)、北区・飛鳥山公園の「渋沢史料館」で開催されました。穏やかな晴天のこの日、五十嵐卓・同館学芸員(当友の会会員です)から、渋沢栄一の事績と館の解説があり、庭園と展示室を見学しました。

同館は昭和57年(1982)、旧渋沢邸の一部だったこの地に開館し、明治から昭和にかけ、日本の近代経済社会の基礎を築いた渋沢栄一の全生涯にわたる資料を収蔵・展示しています。隣接の旧渋沢庭園には、東京都の歴史的建造物に選定された大正期の洋風茶室「晩香廬(ばんこうろ)」と「青淵(せいえん)文庫」の付属施設が、当時の面影を残してます。

渋沢栄一は天保11年(1840)、現在の埼玉県深谷市に生まれ、幼少から『論語』などを学び、その後15代将軍徳川慶喜に仕えました。27歳のとき、パリ万国博覧会のほか欧州諸国を視察、明治維新後は新しい国づくりに関わりました。

明治6年(1873)設立の第一国立銀行総監役(のち頭取)に就任し、喜寿を迎えた大正5年(1916)の辞任まで銀行家として活躍。一貫して「道徳経済合一説」を説き、約500の企業の創設・育成に力を注ぎ、600ほどの教育機関、社会・公共事業、医療関係の支援や民間外交に尽力しました。昭和6年(1931)、91歳で死去。

晩香廬は、大正6年(1917)に丈夫な栗材で造られたレセプション・ルームで、近年改修復元されました。また、氏の雅号から命名された青淵文庫(現在改修中)は大正14年(1925)に竣工した華麗な建物で、書庫や接客の場として使われました。

晩香廬を見学する皆さん

【記録:広報部会・巻渕彰】

えど友プラザ

友の会会員のページ

皆さんからの声にお答えします。

おかげさまで「会報」も第5号をお届けすることができました。この間、会員の皆さんから「友の会セミナー応募はがき」などで、企画・運営や会報について多くのご意見やご感想をいただきました。

そこで、いくつかをご紹介し、あわせて事務局の考えをお伝えします。

これからもお気づきの点がありましたなら、何なりとご要望・ご提案などをお寄せください。ツーウェイ・コミュニケーションを図って、よりよい友の会の運営と会報の充実に反映させていきたい、と考えています。（文中敬称略）

友の会の企画・運営

「ポンペイ展の内覧会に満足」（江東・遠藤茂子ほか2名）、「いろいろ面白い企画があり興味深い」（足立・山崎セツ子ほか7名）、「事業部会の皆さんに、講座設定の努力を感謝」（江戸川・篠崎允）、「江戸を知る内容が魅力だが、すべてのセミナーに参加できず残念」（板橋・山崎林子）、とのお便り。

●事業部会の企画・運営については大方の好評を得ているようです。これからも、より楽しい企画を目指します。

今後希望する企画としては、「江戸名所と老舗のガイドツアーを企画して欲しい」（品川・川崎晴善）、「落語ものセミナーを希望する」（墨田・石井智恵）、「会員同士の親しみを増す外出の企画を」（中央・清水正擁）、といった声が寄せられています。

●会員相互のふれあいは、友の会に欠かせない要素ですので、今後の企画の参考とさせていただきます。

また、「古文書講座を開催してほしい」（飯能・古玉和男）、とのご要望。

●第4号でご案内のとおり、新しい企画がスタートしました。これからも、ぜひご参加ください。

この他、「セミナーは土・日に」（日野・長谷川千恵子）、というご意見の一方、「主婦としては平日の夜が出やすい」（江戸川・澤梅典子）、とのご希望。

●お一人でも多くの方にご参加いただけるように、今後の検討課題とさせていただきます。

「友の会会報」

「読みやすく理解しやすい」（杉並・築地チエ子ほか5名）、「簡にして要を得ている」（板橋・栗田博夫ほか3名）、「レイアウトが読みやすい」（港・磯部晃ほか2名）、とのご感想。

●全般に好感をもって迎えられているようで、ますます頑張っていきます。

「セミナー要録がよい」（台東・桧山純一）、「江戸プラザ欄が面白い」（中野・原絢子）、「催し物の予告があり日程が組みやすい」（大田・川崎和子ほか3名）。

●具体的な誌面の構成・編集にも関心が注がれています。

一方、「もっと早期に届くとスケジュールを立てやすい」（葛飾・小山節子）、「発行回数を増やしてほしい」（文京・栗原幸治）、「会員の声が反映されるものに」（豊島・山部寿）、とのご指摘もありました。

●これらを参考に、会員だれもが参加できる手作りの会報を目指していきます。皆さんからの積極的なご投稿をお待ちしています。

内容については、「現在に残る江戸の言葉や習慣、史跡などを一口メモで紹介して欲しい」（渋谷・玉木達二）、「江戸文化に関する勉強コーナーを設けて欲しい」（港・吉井ゆき子）、という声が寄せられています。

●今後、こうしたご要望にも誌面の許す限り、おこたえしていきたいと考えています。

「年ごとに会報の紙色を変えてはどうか」（文京・並木愛）、とのご意見。

●本号からウグイス色に衣替えしましたが、いかがでしょうか。

江戸東京博物館関係

「ミュージアムショップでの伝統工芸の実演予定を載せて欲しい」（小平・長倉豊司）、「地階の映像ライブラリーの紹介も載せてはどうか」（大田・北村和俊）。

●これらについては博物館に伝えました。

～テーマ特集～

「私と江戸」の投稿を募集中！

皆さんの声をもとにテーマ特集を企画しています。今回のテーマは「私と江戸」。身の回りの江戸文化や江戸情緒、町の話題、趣味や関心事、疑問質問など、“あなたと江戸”に関連した事柄を寄稿ください。

○

◆テーマ投稿要領――春号で特集予定です。
短文（400字以内）を、手紙かハガキで投稿。イラスト・図版や写真も歓迎。採用分には記念品進呈。応募締切：1月31日。会員番号、住所、氏名、年齢、電話番号を明記。友の会事務局「投稿」係あて。

◆…友の会や会報へのご意見、ご感想、また、随筆、詩歌、写真、イラストなども、随時、投稿をお待ちしています。

たかが落語、されど落語

菅沼和男（会員）

私が、初めて落語を聞いたのは、たしか小学校の4、5年生のころと記憶している。ラジオから流れてきた落語は「王子の狐」。狐が年ごろの娘に化け、反対に人間に騙（だま）されるという子供が聞いても極めて分りやすい滑稽噺（こっけいばなし）で、演者は8代目柳枝であった。

明治8年（1875）生まれの祖母から「入谷田圃（たんぼ）で狐に騙され、なかなか家に帰れずに困った人がいたよ」、というような話を聞いたことがあったので、よけいに楽しく聞けたのだろうか、これが古典落語の面白さに引かれた一歩だった。

民放ラジオ局が開局［ラジオ東京（現TBS）は昭和26年（1951）］し、娯楽の乏しい当時は、毎晩のように落語を始めとする寄席演芸の番組がどこかの局で放送されていた。文楽、金馬、三木助（いずれも先代）、あるいは志ん生、円生といった昭和の名人たちが健在で、今思い出してもぞくぞくするような、豪華な顔ぶれの時代であった。

ある時、今はなき人形町の「末広」へ出向いた。靴を預けて下足札をもらい、扉を開けると畳敷きの客席が目の前に現れ、本で読んだ明治・大正期の寄席に足を踏み入れたような独特の雰囲気の中で聞く落語は、また格別であった。

円生の独演会ともなると、いわゆる「膝（ひざ）送り」を何回も繰り返すあの熱気や、噺の合間には表を走る都電の音さえ聞こえる、なんとも懐かしい光景、これらは昭和30年代の中ごろであっただろうか。

その後、タウン誌『丸の内』で、日比谷図書館では、落語のレコードの貸し出しが隠れた人気を呼んでいることを知った。借り出したレコードをせっせとテープにダビングして、テープ・コレクションが始まった。

昭和61年（1986）、TBSラジオの番組でテープマニアの集いなるものを呼びかけ、100名を超える同好の士がラジカセ持参で開場1年ほど経った東陽町の「若竹」に集まった。その場で知り会った7人の仲間とは月1回の会合を重ねて早くも16年、この会をきっかけにテープの数は増え、自分の部屋は落語関係のテープ、資料で埋め尽くされた。

一口に落語といっても滑稽噺、廓噺、人情噺、芝居噺、怪談噺とその内容はいろいろで、四季折々の噺もあり、同じ噺でも演者によって描き方が違ってくるのがまたたまらなく面白く、鑑賞にはなんの知識も理屈もいらない。

落語のテープを集めることによって江戸や明治へと興味・関心の領域が広がり、落語の舞台となった場所を古地図、書物、浮世絵などで調べ、古書店巡りや、定年後はパソコンを手に入れて資料の整理に取り掛かる楽しさも覚え、無聊な日々を送らずにすんでいる。

さて、落語ファンにとって残念なのは古今亭志ん朝師の死（2001年10月1日）であった。出囃子の老松にのって高座に現れたときのあの華やかさと、歯切れの良いテンポで聞く人を魅了した江戸前の話芸を、実際の高座で聞けなくなったことは誠に悲しい限りではあるが、今年の我が家の初席は同師の「御慶（ぎょけい）」のテープを聞いて、在りし日をしのびたいと思っている。

事業部会だより

▼下欄は、これからの開催講座です。申し込みは終了しました。

新規申し込み受付中の講座は次頁へ

古文書入門講座

「古文書講座（入門コース）」（全3回）

開催日：①1月11日(金)、② 2月15日(金)、③3月15日(金) の3回連続
時間：いずれも14:00～16:00　・申し込みは、締め切りました。

・講師：学習院大学大学院史学専攻（近世）
野尻泰宏、小宮山敏和、西村慎太郎の各氏（講義順）
・会場：江戸博・1階学習室2　・参加費：1,000円（3回分、初回払い）
・定員：30名（連続講義ですので3回すべて出席できる方）、会員限定

友の会セミナー

第4回「式亭三馬の広告双六」 講師：岩城 紀子・江戸博学芸員

開催日：1月25日(金) 18:00～19:30／申し込みは、締め切りました。

・会場：江戸東京博物館・1階会議室
・定員：100名（会員本人に限る）　・参加費：200円（当日払い）

事業部会だより

友の会セミナー

●ただいま申し込み受付中です。
多数のご参加をお待ちしています。

第5回「江戸の実用書、武鑑を読み解く」

講師：藤實久美子（学習院大学史料館助手）

開催日：2月2日(土) 14:00～15:30／申込締切：1月19日(土)必着
・会場：江戸東京博物館・1階会議室
・定員：100名（会員本人に限る）　・参加費：200円（当日払い）

江戸には武家が集住しており、鑓を立てた武家の行列が多く行き交いました。路上では武家同士のつばぜり合いを避けるための作法がありました。では、どのようにして人々は武家の行列を見分けたのでしょうか。この疑問にこたえてくれるのが武鑑という実用書です。

今回は、江戸という土地と結びついた武鑑を使って、本屋仲間の仕切りや本の作成・編集方法などを考えてみたいと思います。

講師略歴：ふじざね・くみこ

1964年東京生まれ。1994年学習院大学博士後期課程退学。現在、学習院大学史料館助手。東京農工大学兼任講師。専門は日本近世史・書籍史料論。著書『武鑑出版と近世社会』（東洋書林、1999）。

第6回「都市図の系譜と『江戸一目図』」

講師：小澤 弘（江戸東京博物館教授）

開催日：2月16日(土) 14:00～15:30／申込締切：2月2日(土)必着
・会場：江戸東京博物館・1階会議室
・定員：100名（会員本人に限る）　・参加費：200円（当日払い）

日本の都市図の成立は、室町後期の平安京を描いた「洛中洛外図屏風」ではじまります。これは金雲という大和絵伝統技法を駆使した俯瞰図法の一双屏風でした。江戸時代に入り、新しい都市「江戸図」は、最初「江戸図屏風」「江戸名所図屏風」のように「洛中洛外図」の系譜を引く形式で作られました。

江戸後期になり新しい都市図が誕生しました。それが鍬形紹真の創案した大大版錦絵「江戸名所之絵」であり、その大作肉筆画が「江戸一目図屏風」です。これらの作品を鑑賞して、その意義を論じます。

講師略歴：おざわ・ひろむ

1947年生まれ。明治大学大学院博士課程修了。調布学園短期大学教授を経て、現職。著書に『狩野永徳』など、共編著に『図説江戸図屏風をよむ』『図説上杉本洛中洛外図屏風を見る』『洛中洛外図大観』『大江戸万華鏡』『諸職風俗図絵』ほか。

講座受講申込方法

▼申込方法：
往復ハガキに《開催日「テーマ名」応募》と、
①会員番号②氏名③〒住所④電話番号
⑤会報、友の会の感想・要望、を明記。
・各講座ごと、会員本人に限り、1人1通。
・「返信用の〒あて先」も必ず記入ください。

▼申込先：130-0015東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局あて

▼締め切り：各講座案内を参照（必着）
申込み多数の場合は抽選

会員優待のお知らせ

友の会会員の皆さんにお贈りする、会員ならではの特別優待サービスです。江戸東京博物館で、企画展やイベント観賞、ショッピングをお楽しみください――。

【企画展】 東京建築展

―住まいの軌跡／都市の奇跡―
好評開催中！　平成14年1月20日（日）まで

会員観覧料：　大人450円、小中高生220円
会員の同行者：　大人720円、小中高生360円
*65歳以上の方は無料。
●友の会会員は、図録が10%割引になります。

次回の企画展予告

こどもの世界
―ひな・きもの・おもちゃ―
会期：平成14年2月26日(火)～4月7日(日)

会員観覧料：　大人 450円、小中高生 220円
会員の同行者：　大人 720円、小中高生 360円
*65歳以上の方は無料。

次号は3月1日発行の予定です。

江戸東京博物館友の会
会報〈えど友〉第5号
発行日＝平成14年(2002)1月1日
発行＝江戸東京博物館友の会事務局
130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
Tel. 03-3626-9910
編集・制作＝友の会広報部会